

## 学ぶことは 生きること

難病を抱えながら、  
文学部を卒業して大学院へ

◎文学研究科 博士課程前期課程 総合人文学専攻  
服部 道子 さん

原発性肺高血圧症は、心臓や肺に特別な病気がないのに肺動脈圧が高くなる病気で、「特定疾患(難病)」に指定されている。中学卒業後、准看護師の資格を取り、1978年結婚、その後3人の子どもの育児、義父の介護を経て、服部さんは、この病気に罹って医師に「余命5年」と告げられた。しかし“同じ死ぬのなら夢をかなくてから”と進学を思い立ち、単位制・通信制高校を卒業後、関西大学に入学。見事に文学部を卒業し、さらに大学院で学びを深めようとする服部さんに、現在の心境を聞いた。



服部 道子—はっとり みちこ  
■長崎県出身。2000年に原発性肺高血圧症を発病。05年、長尾谷高校(単位制・通信制高校)を卒業し、関西大学文学部に入学。09年春より大学院文学研究科で哲学を学ぶ。

服部さんは枚方市の自宅からおよそ2時間かけて電車で通学している。移動時には酸素マスクをつけ、ポンペを入れたキャリーバッグを引く。授業の前に、学舎にたどりつくのがまず大変だ。「坂道を上っている時は、こんなにしんどいことを何でやっているのだろうと思いますよ。でも、学ぶことは楽しい。だから坂の上で『楽』が待っていて、今はその前に『苦』を味わっている。そう考えるんです」

今年3月、関西大学文学部を卒業した。4月から大学院で哲学を学んでいる。卒業式での服部さんの晴れ姿は新聞等で大きく取り上げられ、話題になった。それ以来、取材されることが増え、修士論文の準備がなかなか進まないのが悩みだ。

論文のテーマはもう決めている。全国初の炭鉱じん肺訴訟となった「長崎北松じん肺訴訟(1979年提訴)」の原告副団長を務めた母親の生き方を考えてみたい。

何故そのテーマを選んだのか、と聞いてみた。「普通の主婦だった母が、父のじん肺症をきっかけに変わった。父亡き後長崎北松じん肺訴訟の原告団副団長を務め、16年



間闘っているうちに社会の問題点に気づき、生きる権利について考えるようになって、強くなったのだと思います。そういう母の生き方と、いま生きるために闘っている自分の生き方には、重なり合うものがあるのではないかと。ふたつの生に共通する“ほとばしる魂”の正体を解明したい、というのが研究動機です」

じん肺訴訟を理解するために、明治以降の炭鉱の歴史や労働史から学ぶことにした。自分自身の生について語った卒業論文に比べると、修士論文はより社会的広がりを持ったテーマに挑むことになる。

論文を指導するのは、ベルクソンなどのフランス哲学を軸に、日本哲学を含めて幅広い分野を専門とする木岡伸夫教授。ゼミには学部時代から参加している。「入学したころは心理学を学ぶつもりだったのですが、“学びの扉”という授業を通じて哲学の魅力を知りました。その時の先生の“出会い”と題した講義は、心に響くものがありました」

どうしても哲学専修で学びたくなり、“学びの扉”をコーディネートした三村尚彦教授に長文メールで自らの熱意をアピールした。「すると先生から即刻、“あなたが求めているものは哲学です。一緒に勉強しましょう”という返事が返ってきたんですよ」

そんな話をする服部さんは嬉しそうで、とても生き生きとしている。学ぶことの一番の魅力は?と聞くと「できた、という喜び。達成感です」という答が返ってきた。

「余命5年」と告げられてから9年が過ぎ、57歳になった。主治医には「病気の進行が遅い」と言われている。「なぜ元気でいられるのか、と不思議に思うこともあります。きっと勉強することが体に合っているのでしょうね」

読者へのメッセージは「絶対あきらめない」。近年医療の進歩はめざましく、よい治療薬も出てきた。

「どんなことがあっても、私はあきらめない。そのためにも、しっかり体調管理しています」

## 母校愛は永遠に! “おもしろい”と 言われ続ける人生が夢

最高に楽しかった大学時代の思い出と  
同じテンションで話ができる毎を送りたい

◎お笑い芸人「南海キャンディーズ」  
山里 亮太 さん —文学部教育学科 2001年卒業—

オカッパ頭と赤いメガネ、スカーフがトレードマークのお笑いコンビ「南海キャンディーズ」のツッコミ担当の“山ちゃん”こと山里亮太さん。今やテレビ、ラジオをはじめ数多くのレギュラー番組を抱える人気若手お笑い芸人として目ざましい活躍を



続け、コンビでの仕事はもとより最近では報道番組のキャスターにも挑戦するなど単独でも活躍している。硬軟自在の多才ぶりを発揮している山里さんに“大好きな関西大学”についてたっぷり語ってもらった。

山里さんは千葉県出身。何の縁もない関西に来ることになったのは“お笑い”をやるために吉本総合芸能学院(NSC)に入らなかったからというのは知られているところ。

「高校卒業と同時にNSCに入ろうと思って親に話をしたら『あなたと今まで一緒に過ごしてきたけれど面白いと思ったことがない。それなのにいきなり高校を出てやみくもに大阪に行くのは許せない』と大反対された。諦めるなんてできなかったので話し合いの結果、関西で10人が10人即答できる有名な大学に入れたら関西行きを許してやるとなって、探した結果が関西大学だったんです。パンフレットを見てさらにここでキャンパスライフを送ってみたいと猛烈に勉強しました」

1年間の浪人生活の後、念願の関西大学に合格。“お笑い”が最終の目標だったためその夢に少しでも多くのことが活かせるようにと文学部の教育心理学を専攻。寮で4年間を過ごした。それまで「実は人見知りで、人と目をみてしゃべるのも苦手。緊張するタイプだった」気質が4日間にわたるパンカラ気質あふれる“熱い歓迎”の入寮オリエンテーションで一転。「心配していた関西での生活の不安」も同時に消し飛んだ。

その後は大学生活を謳歌するという言葉通りの毎日。授業で楽しみサークルで楽しみ、イベントにも全力で取り組んできた。「当初2年間はお笑いを目指して来たことを忘れて大学生活を堪能していました。このまましっかり勉強をして教員免許も取っ



山里 亮太—やまさとりょうた  
■1977年、千葉県生まれ。千葉経済大学附属高等学校、関西大学文学部教育学科卒業。3年次生から吉本総合芸能学院(NSC)に通い、2003年に“しずちゃん”こと山崎静代さんとお笑いコンビ「南海キャンディーズ」を結成。2004年「ABCお笑いグランプリ」優秀新人賞ほか、多くの賞を受賞。テレビ、ラジオ等レギュラー多数。歌手の矢井田瞳さんとは同級生。著書に、「天才になりたい」(朝日新書)。

て面白い先生になっちゃおうかなんて思い始めた頃に、寮のOBから喝を入れられてNSCに願書を出したんです。この時の先輩からの後押しがなかったら“お笑い”はやっていなかったと思います。ゼミの山下栄一先生にも本当にお世話になりました。山下先生は『自分の夢を見つけてそれを一番大事にしながら学業を行っていけばいい』と僕の夢に対してとても寛容で、レポートでも心理学とお笑いを結びつけてくれたりして、僕の“お笑い”への夢というのは周りの人にすごく恵まれてきて叶ったように思います。これからの夢は『面白いと言われ続けること』と『楽しい毎日過ごすこと』です」

卒論は「笑いについて」。どうやれば笑いが起こるのかについて書いた。浪人時代の1年と大学2年間の3年間のお笑いブランク期間が幸いし、NSCでは黄金期といわれる22期生という強運の持ち主でもある。今はレギュラー番組も多数持つ売れっ子になり、先日は番組企画で母校ロケも行った。

「僕が一番ラッキーなのは夢に向かっていく過程が楽しかったところ。あとは目標を見つけていたこと。大学生活って自分で時間をコントロールできるから目標を持った時点で夢を叶えるために今何をやるのかという逆算ができるようになる。自分の目標に直結させていく作業に移せるのが大学生の醍醐味。そこにいかに遊びを組み込むかとか、その遊びを自分の目標にいかに関係させられるかってことを考える作業ができれば、こんなに充実した4年間はないというような毎日を過ごせます」

“大学愛”に満ちた先輩が後輩たちに熱いメッセージを残してくれた。